

TRANSITION TO HEALTH (013)

風邪・インフルエンザ予防 ④

ワクチン先進国・アメリカに学ぶ

～ インフルエンザワクチンは やはり危険だった！ ～

はじめに

皆さんのうちどれくらいの方が、インフルエンザワクチンに効果があると思っていられるのでしょうか。実は、インフルエンザワクチンは「劇薬」で、「微量でも死に至る可能性がある薬物」です。だから、毎年、接種直後からの重篤な副作用や死亡例が報告されているのです。

私の周りには、「今までに2度ワクチンを打ったことがあるが、その時（シーズン）だけインフルエンザに罹ってしまい、症状もきつかったので、もう打っていない。」「家族のうちでワクチンを打ったのは中学2年の娘だけで、その娘だけがインフルエンザに罹ってしまい、ほかの家族には罹らなかった。」「1度ワクチンを打ったことがあるが、その時（シーズン）は2回もインフルエンザ（A型とB型）に罹ってしまったので、もう打たない。」「事務所でワクチンを打ったのはK君だけ、彼が真っ先にインフルエンザに罹り僕にうつした。（このK君は、その後ワクチンを打っていない）」などという話は非常に多く、「ワクチンを接種した人ほど感染しやすい」という印象を、以前から、私は持っていた。実は、これを裏付ける情報は山ほどあるのである。

そもそも季節性インフルエンザは、大半の人は感染しても発病することもなく、20%の人は知らず知らずの間に免疫を獲得してしまうか（これを不顕性感染という）、発症しても軽い症状で済んでしまい、インフルエンザに感染したことを自覚しないことも多く、実際に発病するのは一部の人たち（日本国民の10～20%）である。少なくともインフルエンザに関しては、「ワクチン無効」はウイルス学を学んだ者の常識であり、「予防不可能」は医学を学んだ者の常識である。ただ、「重症化を阻止できるのではないか」という幻想を抱いているだけなのである。私は、重症化を阻止できたという信頼できる報告に、未だお目にかかったことがない。

『ワクチン・セイフティー・マニュアル』（改訂第2版・2012年）より

・・・ワクチンは、接種するほど感染しやすく、重症化しやすい・・・

健康通信しずおか No.7 で紹介した『Vaccine Safety Manual』（2008年）が2012年（昨年）改訂された。その後の2008～2012年のWHO、CDC（米国疾病対策予防センター）、FDA（米国食品医薬品局）等の最新データが加味され、インフルエンザに関する180にも及ぶ科学的根拠に基づいて書かれている。「ワクチン

公益財団法人 静岡県産業労働福祉協会

〒421-0113 静岡市駿河区下川原6丁目8番1号

TEL054(258)4855(代) FAX054(258)4403

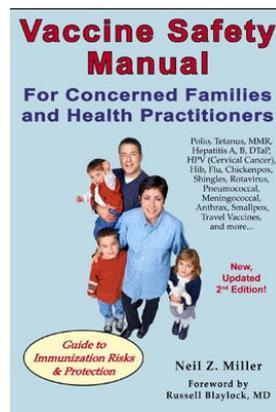
<http://www.kenshin-shizuoka.net>

E-mail:info@kenshin-shizuoka.net

に感染防止効果がない」こと、「重症化（肺炎）阻止効果もほとんどない」こと、「CDCが幼児へのワクチン接種を勧奨した途端、インフルエンザ感染による死亡が激増した」ことは既にお伝えしましたが、本書にはワクチン接種直後の重篤な副作用・死亡例が22症例記載されており、やはり、ワクチンは無効であるばかりか、かえって危険であり、インフルエンザに感染しやすく、また重症化しやすいことは、動かしがたい事実としか言いようがない。

インフルエンザは、確かに高齢者や心臓病、肺疾患、腎不全、糖尿病、高度の貧血、免疫不全などの基礎疾患を有する人にとっては危険ですが、健康な人にあっては、薬を使わずに養生すれば3日ほどで下熱し、5日もすれば回復するものです。発熱は、ウイルスと闘うために免疫力を最大限に発揮しようとして自ら出しているもの、解熱剤で下げたまま、免疫力が削がれ、ウイルスの増殖をゆるし、治癒が遅延化してしまう。

米国には、注射用ワクチンが5銘柄、そして『FulMist』という鼻腔に噴霧するタイプのワクチン（希薄化された生ウイルスを含む）が1銘柄あり、年齢階層により使い分けられているようだが、いずれも同じように希薄化されたウイルスが含まれている。ワクチンというものは、そもそも意図的に、軽くその病気に罹らせて免疫系を刺激するようにデザインされている。2006年にFDAが認可した『FulMist』は、微量だがウイルスが活着しているため、鼻粘膜で増殖して、インフルエンザ様症状を引き起こしてしまうのだという。また、『FulMist』の場合は、特に免疫系の弱い人では、ワクチン株ウイルスが、生きたウイルスをどんどん増殖させてしまい、インフルエンザ様症状ばかりか、インフルエンザそのものを引き起こしてしまうのだという。



・・・ワクチンは、どのように作られているか・・・

一般的な作り方を簡単にいうと、ワクチン株ウイルスは、鶏の卵胚に接種され、数週間培養され増殖、その後、ホルムアルデヒド（発がん性がある）で不活化され、水銀化合物であるチメロサル（神経毒がある）で保存される。このチメロサルは取り除かれることなく、多くのインフルエンザワクチンには、用量当たり25µg（マイクログラム）も残留している。ワクチンにはさらに、ポリエチレングリコール、ポリソルベート80（子宮頸がんワクチン：サーバリックスにも含まれ、雌ネズミで無排卵、雄ネズミで睾丸萎縮をきたすという疑惑の免疫賦活剤）、ハイドロコルチゾン（副腎皮質ホルモン）、ネオマイシンとポリミキシン（抗生物質）、デオキシコール酸ナトリウム、MSG（グルタミン酸ナトリウム）、PORCINE（豚のジェラチン）などが含まれている。そして、3つのワクチン株はブレンドされて一つのワクチンができ上がり、FDAに認可され製薬工場から出荷される。安全性と有効性を確認するための科学的な比較試験は一切必要とされない。それもそのはず、安全性や有効性を確認する時間はないのである。半年後には接種を開始しなければ、インフルエンザシーズンが終わってしまうのである。ワクチン以外の医薬品や化粧品、食品添加物だったら安全性の確認は必須なのに、ワクチンには不必要とされ、少しばかりの補償制度はあるものの自己管理責任である。「サインしたでしょ。体調の悪い時に接種したあなたが悪い!？」と。

・・・ワクチンによる重大副作用は、起こるべくして起きている・・・

日本のインフルエンザワクチンの添付文書にも記載されている重大副作用としての「ショック（アナフィラキシー様症状）」「急性散在性脳脊髄炎」「ギランバレー症候群」「けいれん」「肝機能障害」「喘息」「血小板減少」「血管炎」「間質性肺炎」「脳炎・脳症」「皮膚粘膜眼症候群（スティーブンス・ジョンソン症候群）」などは、起こるべくして起きている。これらは、発生頻度不明と記載されてはいても、毎年報告のある副作用である。

おわりに

海外では多くの医師たちが、「ワクチンは、予防するはずの病気を逆に生み出している」「ワクチンこそが病気や健康被害の最大の原因である」「ワクチンは病気の拡大の“時限爆弾”である」等々、警告を発している。ワクチンは何十種類もの有毒物質が含まれた混合エキスともいわれ、数十年後に原因不明の「自己免疫疾患」や「難病」を発症したり、「癌」になったりするの、「実はワクチンが原因だ」と警告する医師もいる。私は、これらの警告を払拭するだけのデータを見つけ出すことができない。では、日本のワクチンは安全なのか、いや、ほぼ同じであろう。安全性も有効性も否定的なのだから避けるのが道理であろう。ワクチンを打って罹らなければ「ワクチンが効いた」、罹ったら「お蔭様でこの程度で済んだ」、そして、ワクチンを打たずに罹ったら「それ、みたことか!」、罹らなかったら「運が良かっただけ」と。いい加減に目を覚ましましょう。目を覚ますのはいつか・・・それは「今でしょ!」

TRANSITION TO HEALTH（健康への変革） （理事長・医師 丸山正明）